

2008 年

日本都市計画学会

学会賞・功績賞・国際交流賞受賞者

ならびに授賞理由書

(社) 日本都市計画学会

# 日本都市計画学会

2008年 学会賞・功績賞・国際交流賞受賞者

ならびに授賞理由書 目次

## 1. 学 会 賞

1) 受賞者一覧 .....	1
2) 選考経過および各賞の対象内容 .....	2
3) 授賞理由	
1. 石川賞 .....	3
2. 論文奨励賞 .....	4
3. 計画設計賞 .....	9

## 2. 功 績 賞 ・ 国 際 交 流 賞

1) 受賞者一覧 .....	11
2) 選考経過および各賞の対象内容 .....	12
3) 授賞理由	
1. 功績賞 .....	13
2. 国際交流賞 .....	15

## 日本都市計画学会 学会賞受賞者

(各賞五十音順・敬称略)

### 石川賞

タウンマネージメントプログラムによる商店街再生事業

-高松丸亀町商店街 A 街区第一種市街地再開発事業-

高松丸亀町商店街振興組合理事長	古川 康造
高松丸亀町商店街 A 街区市街地再開発組合理事長	
兼 高松丸亀町壱番街株式会社代表取締役	古川 新二
高松丸亀町タウンマネージメント委員会委員長	小林 重敬
高松丸亀町まちづくり専門家チーム代表	西郷真理子

### 論文奨励賞

公園の防犯性に関する実証的研究

科学警察研究所犯罪行動科学部犯罪予防研究室研究員 雨宮 護

小流域を基礎とした緑地環境計画に関する研究

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 片桐由希子

都市交通戦略の策定に向けた統合型交通需要予測手法の開発と適用

名古屋大学大学院環境学研究科研究員 金森 亮

関東大震災復興期の耐火耐震(RC造)建築の普及過程における  
復興建築助成株式会社と共同建築に関する研究

東京理科大学工学部第一部建築学科助教 栢木まどか

インドネシアにおけるローコスト住宅生産供給システムの成立と展開

(財)道路空間高度化機構 斉藤 憲晃

東京下町における河岸の歴史的変遷に関する研究

東京大学大学院工学系研究科産学官連携研究員 鹿内 京子

被災市街地の復興過程におけるコミュニティの分解と再生に関する研究

「社会的孤立」の発生要因の分析を通して

都市調査計画事務所 田中 正人

都市広場をめぐる石川栄耀の活動に関する研究

立教大学観光学部講師 西成 典久

連鎖的移動のための空間相互作用モデルと都市分析への応用

首都大学東京システムデザイン学部経営システムデザインコース助教 本間 裕大

### 計画設計賞

水と緑の回廊により 21 世紀環境共生都市の基盤を創る -岐阜県各務原市における取り組み-

各務原市長 森 真

東京大学大学院教授 石川 幹子

神戸市六甲道駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業における都市デザインの活動と成果

神戸市長 矢田 立郎

六甲道駅南地区まちづくり連合協議会

六甲道駅南地区都市環境デザイン調整会議代表 安田 丑作

## 2008 年 日本都市計画学会

### 学会賞 選考経過

2008 年（2007 年度対象）学会賞は、会員が推薦した石川賞候補 1 件、論文奨励賞候補 13 件、計画設計賞候補 3 件、計 17 件が審査の対象となった。

表彰委員会（学会賞選考分科会・委員全 19 名）は各々の候補の業績について複数の担当審査委員が独立に査読および調査を実施し、各委員から提出された書面での評価にもとづき、分科会で慎重に検討の結果、受賞候補を選定した。

特に評価の分かれた案件については委員会席上でその結果を照合、討論、協議し、分科会の最終審査結果とした。さらに分科会の審査結果を理事会に諮って、石川賞 1 件、論文奨励賞 9 件、計画設計賞 2 件の受賞が決定した。

---

### 各賞の対象内容

#### 石川賞

都市計画に関する独創的または啓発的な業績により、都市計画の進歩、発展に顕著な貢献をした個人または団体を対象とする。

#### 論文奨励賞

都市計画に関する将来性・発展性が顕著な研究論文を最近発表した会員を対象とする。

#### 計画設計賞

都市計画に関する計画、設計、事業などに関する近年の作品で、都市計画の進歩、発展に顕著な貢献をしたものを対象とする。

石川賞	
受賞者	<p>高松丸亀町商店街振興組合理事長 古川 康造  高松丸亀町商店街 A 街区市街地再開発組合理事長 兼 高松丸亀町吉番街株式会社代表取締役 古川 新二  高松丸亀町タウンマネジメント委員会委員長 小林 重敬  高松丸亀町まちづくり専門家チーム代表 西郷 真理子</p>
作品名	<p>タウンマネジメントプログラムによる商店街再生事業  -高松丸亀町商店街 A 街区第一種市街地再開発事業-</p>
授賞理由	<p>本再開発事業は、1989 年の高松丸亀町生誕 400 年祭をきっかけに発意され、20 年近くの長期にわたる地権者、専門家の協働により実現した商店街再生事業であり、地方都市中心市街地再生の先進モデルといえるプロジェクトである。以下の理由により本事業はわが国都市計画の先導的事業として石川賞に値すると推薦します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.ドーム広場を初めてとして、街並みデザインに配慮した建築空間、公共空間など質の高い快適で市民が楽しめる空間を創出したこと。</li> <li>2.地権者が事業リスクを負担しながら、経済的で効率的な事業スキームを構想し、利用と所有を分離することによって合理的、魅力的な土地利用を実現したこと。地価を顕在化しないことによる再開発方式を具体的に示したこと。</li> <li>3.地権者が主体となって設立されたまちづくり会社が、施設全体を一括してマネジメントする責任体制を作ったこと。さらに、事業の適切な運営のために、専門家によるマネジメント委員会がタウンマネジメントプログラムを作成し全体の進行管理を行っていること。</li> </ol> <p>以上、地権者、専門家の協働による持続的な商店街再生事業の取り組みにより、質の高い公共空間と魅力的な商業空間が創出され、市民が地方都市の再生を具体的に体験する実例を示すなど、本事業の成果は多大であり、石川賞に十分に値する。</p>

論文奨励賞	
受賞者	雨宮 護
作品名	公園の防犯性に関する実証的研究
授賞理由	<p>本論文は、公園における犯罪および逸脱行為の実態、これらに対する不安感を実証的に検証し、一方で防犯まちづくりの発展とその批判を整理することで、公園を対象とした防犯まちづくりのあり方に関する提言を行った論文である。評価できる点としては、まず第一に極めて今日的なテーマを取り扱い、それを調査によって定量的な形で実態を明らかにした点があげられる。第二に、論文構成およびとりわけ前半の実証的分析における論理展開は確実であり、資料の検討、分析手法の使用法も相当の水準を維持している。第三に、論文記述の形式がすぐれており、文章、引用・参照の方法など学術論文としての一定の形式が保たれている。よって本研究は、日本都市計画学会論文奨励賞のふさわしい内容を十分に有していると考えられる。</p>

受賞者	片桐 由希子
作品名	小流域を基礎とした緑地環境計画に関する研究 -東京都中央区を事例として-
授賞理由	<p>本論文は、「小流域」概念をもとに地域の環境評価システムについて論じた著者の学位論文である。この論文の関心は、都市の環境負荷の軽減を目途に、樹林地や農地をはじめとする自然的土地利用の保全、創出をいかに戦略的に展開するかという点にある。そのためには、環境負荷軽減と関わる地表の様態を過去と現在の2時点において比較評価し、それに現行の政策を重ねて将来の自然的土地利用の動向を予測する必要がある。著者は、主として横浜市を対象とし、市域を「小流域」に区分し、GISを活用して緑の量(樹林地、農地)、水循環システム(雨水浸透率)、生物生息可能性などに関する情報を「小流域」毎に整理し、重ね合わせる作業によってこの課題に取り組んだ。情報の精度の違いの調整、過去の土地利用状況のメッシュデータ化など膨大な手続きを経て、サステナビリティという観点から具体的な政策シナリオを記述するに至っており、論文奨励賞に値する力作と判定された。</p>

受賞者	金森 亮
作品名	都市交通戦略の策定に向けた統合型交通需要予測手法の開発と適用研究
授賞理由	<p>本論文は、都市圏に適用可能な統合型交通需要予測手法を開発し、その有用性を実証した。活動内容選択－目的地選択－交通手段選択－経路選択からなる Nested Logit モデルと統合型ネットワーク均衡モデルを用いる分析の枠組みは先行研究と同一であるが、1) 時間帯ごとの活動内容選択に、同一の活動継続、別の活動選択、帰宅を組み入れて滞在箇所を連続的に把握し、2) 前時間帯の活動・交通行動履歴を考慮し、モデルの整合性を高め、3) 移動目的による自動車経路選択行動の違いを考慮する等のモデルの改良を提案している。実証研究は、名古屋都市圏にモデルを適用し、1) 交通基盤整備に伴う予測交通量、2) ロードプライシング課金額の相違による自動車利用削減、3) 駐車デポジット制による課金額と返金額による自動車削減の相違を示し、提案モデルの有用性を示した。論理性がより高く、実用的な都市圏交通需要モデルを開発しており、論文奨励賞に値する。</p>

受賞者	栢木 まどか
作品名	関東大震災復興期の耐火耐震(RC造)建築の普及過程における復興建築助成株式会社と共同建築に関する研究
授賞理由	<p>本論文は、関東大震災復興過程における建築物の不燃耐震化政策の展開を跡づけ、特に復興建築助成株式会社の果たした役割を克明に解明したものである。</p> <p>関東大震災の復興については、これまで様々な研究蓄積があるが、それは主に復興事業によるインフラ整備に関連するものであり、復興建築物の研究では直接供給政策としての同潤会アパートに関するものがあるにとどまっていた。本研究は、震災復興過程における建築物不燃耐震化の規制誘導政策に着眼しその詳細を明らかにしたもので、既往研究の欠落部分を補う上で大きな意義が認められる。特に、内田祥三文庫から「共同建築補助金審査委員会関係資料」を発掘し、共同不燃化助成の対象とされたほぼ全ての建築物についてその状況を把握・分析することに成功したことは特筆に値する。</p>

<b>受賞者</b>	齊藤 憲晃
<b>作品名</b>	インドネシアにおけるローコスト住宅生産供給システムの成立と展開
<b>授賞理由</b>	<p>インドネシアの住宅政策の展開過程を、とくにその柱である「簡素住宅」に焦点をあて、住宅市場での供給に載せるシステムやその問題点などを明らかにしようとした。「簡素住宅」は、住宅のコア部分のみを、低利融資によって低中所得者に取得させ、やがてセルフヘルプで増築してより大きな住宅へ成長させていくことを期待するという興味深い制度。政府が完成した住宅を供給するわが国の公営住宅とは対極に位置する。今まで建築サイドの興味からとり上げられることはあったが、インドネシアの住宅政策をたどることから追求しようとしたものはなかった。論文では、「セルフヘルプ<math>\leftrightarrow</math>コモディティ」「フォーマル<math>\leftrightarrow</math>インフォーマル」という二軸を設定し、この座標における住宅政策の位置を指標に検討が進められるが、結論が（第5章「システムの異議、限界と今後の課題」）が一般論で終わってしまった点が残念。とはいえ、原語にあたりながら、インドネシアの住宅政策についてまとめた論文を仕上げたことには価値があり、今後の更なる検討と成果を期待して奨励賞に値すると判断した。</p>

<b>受賞者</b>	鹿内 京子
<b>作品名</b>	東京下町における河岸の歴史的変遷に関する研究
<b>授賞理由</b>	<p>本研究は、東京下町における河岸の変遷を、5期（江戸期・明治期市区改正以前・明治期市区改正後・関東大震災後・第二次世界大戦後）に分けて、さまざまな歴史資料の丹念な収集と分析にもとづき、河岸の土地利用実態の変化を浮かび上がらせている。次に5つの河川・運河沿いの河岸を取り上げて、土地利用分類（明地・物揚場・納屋・土蔵・石庫・煉瓦造倉庫・居宅など）にもとづき、土地利用と土地所有の変化を詳細に記述している。さらに東京市会史や東京都議会史などをもとに、土地所有の法制度を明らかにしている。</p> <p>以上のように本論文は、水辺空間の原型として河岸の歴史的変遷を解明しており高く評価でき、今後の水辺空間の研究に必須の文献の一つとなる可能性がある。また河岸の成立と変化に欠かせない産業構造との関連をはじめ、研究の発展性も極めて高い。よって本研究は、日本都市計画学会論文奨励賞のふさわしい内容を十分に有していると考えられる。</p>



受賞者	田中 正人
作品名	被災市街地の復興過程におけるコミュニティの分解と再生に関する研究 「社会的孤立」の発生要因の分析を通して
授賞理由	<p>阪神淡路大震災後の復興区画整理事業の結果、人々の居住空間は大きく再編されることになったが、その結果人々の近隣関係がどのように変わったかをアンケート等によって調査し、空間と社会関係の相互規定性を実証的にあきらかにした。とくに、従前の社会的接触を維持・再生できない人々が少なからぬ存在していることを明らかにし、その原因を分析、人間関係を規定する空間の重要性を描き出している。実証の方法論について、客観性を欠くのではないかという指摘もあったが、調査対象や目的から見ると、最後までやり通した意義は大きい。また、「空間の再編」をテーマとしながら、空間そのものの記述が乏しい点も気になった。しかし、社会＝空間関係を実証的に明らかにした意義は大きく、単に大災害における復興のあり方を示唆するだけでなく、豊かなコミュニティを維持・形成するための空間的条件へ敷衍しうる内容がある。今後の展開を期待したい。</p>

受賞者	西成 典久
作品名	都市広場をめぐる石川栄耀の活動に関する研究
授賞理由	<p>石川栄耀に関する論述は数多いが、本研究は「都市広場」との関連を丹念に調べて追及した点に意義がある。石川の関わりが明白でこれまでも何度かとりあげられている新宿歌舞伎町の広場以外に、麻布十番商店街の広場状空地、名古屋市大洲の広場状空地という、石川の関わりが未だ不明であった事例を丹念に精査している点に論文としてのオリジナリティがある。しかし、この二事例において石川の関わりについて、戦災復興計画をリードする立場での関わりはあっても、直接的関わりを示す資料データには乏しい。それゆえに帰納法的に類推も入った論証の方法をとって「人と人とのつながり」を目的とする石川の都市広場の思想を解明しようとした。石川の言説と区画整理の計画図と照合したりしながら解読している点は、証拠を一つずつ重ねながら推理をしていく探偵小説を読むかのごとく、興味深い構成である。現代の都市の開発事業によって形成される公開的な空地をはじめ都市のオープンスペースのあり方を考えるためにも、石川のテキストを解読することは意義あることを示した論文として高く評価できる。今後の活躍が期待され、奨励賞に十分に値する論文である。</p>

受賞者	本間 裕大
作品名	連鎖的移動のための空間相互作用モデルと都市分析への応用
授賞理由	<p>本研究は、空間相互作用に関して最も重要かつ基本的な Wilson のエントロピーモデルを基礎として、都市空間における連鎖的移動(トリップチェーン)を記述するための数理モデルを考察したものである。本研究では、直行移動では明らかになっていた、エントロピーモデルとマルコフチェーン、非集計モデルの等価性が、先験確率と移動コストの設定が一定条件を満たし、「トリップチェーンの移動コストが、それを構成するゾーン間のコストに分解できる」場合には、連鎖的移動である立ち寄りトリップ、周遊トリップ、複数目的を含む周遊トリップにおいても成立することを示し、3つのモデルの間に大変見通しの良い関係を明示することができている。また、非集計モデル適用時の選択肢集合の爆発という課題も、この条件下では解決できることを示している。一方で、本研究では、国内観光流動の推定等、理論面に留まらない学術的貢献も評価される。</p> <p>都市・地域や各種商業空間における連鎖的移動を分析・予測するための新たな規範的枠組みを提示したものとして、発展性も大きく、高く評価できる。</p>

計画設計賞	
受賞者	各務原市長 森 真 東京大学大学院 石川 幹子
作品名	水と緑の回廊により 21 世紀環境共生都市の基盤を創る -岐阜県各務原市における取り組み-
授賞理由	<p>今回対象となっている作品は、いずれも公園や施設としては、「水」の処理に繊細な配慮がなされており、人が水辺に積極的に接することが出来る上質な空間を形成している。これらのプロジェクトがいずれも宅地開発や砂防ダム予定地、単なる溜池という、通常ならば平凡な土地利用がなされてしまう危険性がある土地を、一つのコンセプトによって市民のためのオープンスペースとして存在意義を確たるものとしている。これは一重に、緑の創生を政策課題として取り上げた市長の卓越した見識によるところが極めて大きい。「水と緑の回廊」計画そのものは、市民とのコラボレーションが重要な手段となっており、今後さらに計画の完成に向けて、時間をかけた努力が期待される。この計画および3つの作品は、幅広く市の産業政策などとも結びついて、各務原市をユニークで活気ある都市に変える原動力になっており、計画設計賞に十分に値するものである。</p>

受賞者	神戸市長 矢田 立郎 六甲道駅南地区まちづくり連合協議会 六甲道駅南地区都市環境デザイン調整会議代表 安田 丑作
作品名	神戸市六甲道駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業における都市デザインの活動と成果
授賞理由	<p>六甲道駅南地区の震災復興の再開発事業として地区面積5.9haの大規模で当初の都市計画案に対し地区住民も含めた行政、コンサルタント、設計者、の意見交換を行いながら「2段階都市計画決定」の合意形成を行い10年の短期間で事業の完成をみた記念碑的の事業の一つである事業にあたっては「まちづくり協議会」を組織し、1haの防災公園をテーマに「基本計画会議」を設置し、4地区の協議会の計画を全体で整合あるものにした。同会議の「都市計画デザイン調整会議」は都市計画再決定後、景観デザイン部会として発展し以後の継続的活動を行った。都市デザインの取組みを推進した活動とその成果は高く評価される。住民のまちづくり提案も入れて都市計画により事業完成後の住民棟の小公園と中央広場を結ぶネットワークの一体性確保により周辺住民の交流の場として活用されている。都市デザインそのものよりその取組みの推進が計画設計賞に値する。</p>



## 日本都市計画学会 功績賞・国際交流賞受賞者

(各賞五十音順・敬称略)

### 功績賞

末吉 興一	元北九州市長
平峯 悠	NPO 地域デザイン研究会
本多 義明	福井大学名誉教授
森 康男	福井工業大学教授

### 国際交流賞

太田 勝敏	東洋大学教授
朴 柄柱 (Park Byung-Joo)	弘益大学名誉教授

## 2008 年 日本都市計画学会

### 功績賞・国際交流賞 選考経過

2008 年日本都市計画学会功績賞・国際交流賞は、理事会のもとに設置された表彰委員会（特別功労表彰選考分科会）が、理事・評議員から候補者の推薦を受け、その中から選考分科会で慎重に検討した結果、功績賞 4 名、国際交流賞 2 名を選考し、理事会に推挙した。なお、国際交流賞の授与は、年内に別途機会をみて表彰するものとする。

なお、各賞の対象の種類は以下の通りである。

---

#### 各賞の対象内容

##### 功績賞

長年にわたって、都市計画学の進歩、発展に寄与してきた者で、その貢献が、社会的、学問的に見て顕著な者を対象とする。

##### 国際交流賞

長年にわたって、都市計画の国際的交流に携わり、海外諸国との交流並びに啓発普及と人材育成に貢献した者（外国人・日本人）を対象とする。

功績賞	
受賞者	末吉 興一
授賞理由	<p>末吉興一氏は、昭和 62 年に北九州市長として着任し、昭和 63 年 12 月に北九州市の総合計画である「北九州ルネッサンス構想」を策定し、以降、活力あるまちとして再生するための様々な施策に取り組んできた。特に都市計画分野でもっとも力を注いだ施策が小倉都心地区のまちづくりであり、都心機能の強化という方向性が評価できる。また、都心の賑わいエリアを横断する紫川を軸とした都心景観が大きく改善した点も評価できる。これらは市民による評価によっても裏付けされている。北九州市が毎年実施している市民意識調査によると、10 年前と比較して都心整備に関連する項目すべてにおいて、満足度が大幅に増加しており、都心のまちづくりに対する市民の評価が極めて高いことが指摘される。</p> <p>以上のような北九州市の小倉都心地区において取り組まれてきた都市整備の実践は、末吉氏の積極的な姿勢と情熱的な取り組みがなければ決して成功することのなかった事業であるといえる。よって、日本都市計画学会功績賞を授与するものである。</p>

受賞者	平峯 悠
授賞理由	<p>平峯悠氏は、昭和 39 年に大阪府に入庁し、一貫して都市計画的なセンスを重視した都市開発や都市基盤整備に取り組んだ。在任中の平成元年には、現在の NPO 地域デザイン研究会の前身の「泰山塾」を自ら創設し、以来代表（理事長）を務めている。大阪府総合計画課在職中には、空港連絡道路の都市計画など極めて重要な業務を遂行する一方、景観を重視する都市政策のさきがけとしてアメニティ豊かなまちづくりを先導した。さらに、阪神淡路大震災直後に組織された「災害に強い都市基盤検討委員会」での闊達な議論とそこからつくられた指針は、現在も基盤整備の指針として活かされている。また、行政の枠を超えた活動では、産官学の力を結集、若手技術者の育成も念頭に、研究活動、市民まちづくりグループの支援活動等、都市の本質を見失うことなく、かつ、実践的に取り組んできたといえる。</p> <p>以上のような理論とその実践は、都市・地域づくりへの氏の貢献は極めて大きく、日本都市計画学会功績賞を授与するものである。</p>

<b>受賞者</b>	<b>本多 義明</b>
<b>授賞理由</b>	<p>本多義明氏は、日本都市計画学会中部支部設立に際して発起人会のメンバーとして支部設立にあたり多大なる尽力をされ、平成2年から2年間支部長を勤められた。支部長時代には、外国人研究者による国際講演会を主とした国際交流事業を始められた。また、中部支部管内の大学・研究機関の都市計画研究者のデータベースを作成する事業を興し、その結果は現在の支部事業の行政連携事業、研究室紹介大会事業の礎となっている。社会貢献については、福井地域環境研究会、(財)地域環境研究所の設立および先駆的な地方都市研究活動を展開されるとともに、これを通して、都市計画・地域計画に携わる数多くの自治体職員・民間会社員等の人材育成にも尽力され、地方の都市計画行政の推進に大きく寄与されている。</p> <p>以上のように氏は、本会の発展ばかりでなく、地方の都市計画における様々な社会的活動に顕著な貢献に、日本都市計画学会功績賞を授与するものである。</p>

<b>受賞者</b>	<b>森 康男</b>
<b>授賞理由</b>	<p>森康男氏は、昭和37年に日本道路公団に入社以来、日本の高速道路建設の黎明期から中心的な役割を果たし、高速道路の環境問題の総合的な対策など先進的な取り組みに尽力された。平成2年には大阪大学工学部教授に就任され、道路交通システムにおける都市計画学・景観工学の面から、学識経験者として継続的に地域的な都市行政に寄与された。平成14年に福井工業大学教授に就任された後も、長年に渡って研究の推進及び後進の指導育成に努め、多くの研究者・技術者を社会に送り出している。本会活動においては、平成10年に関西支部長を務められている。氏は、高速道路建設に実務的・学術的観点から関与され、例えばわが国で初めて2車線道路における交通流シミュレーションをコンピュータを用いて開発される等、実務への適応を通じて多くの手法の開発に貢献した。</p> <p>以上のように、実務と教育双方に豊富な知識・経験を持ち、それらに基づく実行力はわが国の学術と技術の発展のために多大の貢献に、日本都市計画学会功績賞を授賞するものである。</p>



<b>国際交流賞</b>	
<b>受賞者</b>	<b>太田 勝敏</b>
<b>授賞理由</b>	<p>太田勝敏氏は、昭和46年に東京大学工学部都市工学科に勤務して以来、現在に至るまで、都市計画研究に多大なる貢献をしてきた。特に国際的な活動に数多く参画し、都市計画研究および教育に大きな影響を与えている。本会活動としては、昭和51年以降、国際委員長として、日本・韓国・台湾による国際都市計画シンポジウムの立ち上げおよび運営に主導的にかかわり、今日の本会国際交流活動の礎を築いてきた。また、氏が設立した、IAESTEの日本事務局は、学生同士の国際的なインターンシップ活動の土台となって、現在に至るまで都市計画をはじめとする各分野での学生の国際交流の機会創出に貢献している。また、海外の大学等における若手研究者育成プロジェクトの指導など、実務調査や研究者育成においても実績は数多く、ネットワーク構築にも大きく貢献している。</p> <p>以上のように氏は、本会での国際交流活動および都市計画分野での実務での国際交流、海外若手研究者育成などの国際的活動において、多大なる貢献を果たしてきており、日本都市計画学会国際交流賞を授与するものである。</p>

<b>受賞者</b>	<b>朴 炳柱 (Park Byung-Joo)</b>
<b>授賞理由</b>	<p>朴炳柱氏は、現在弘益大学名誉教授を勤めるとともに、大韓国土・都市計画学会長(1978-1980)、大韓国土・都市計画学会の顧問(1980年から現在)、韓国中央都市計画委員会審議委員(1969-1990)、国土研究院理事長(1988-1994)などを歴任し、長年にわたり都市計画の実務、研究、教育に努め、韓国の都市計画に多大の貢献をされた。それとともに大韓国土・都市計画学会の会長として勤めていた時期である1979年から公式的に日韓の間に都市計画関連情報と資料の交流をする等都市計画における日韓交流の実現を図るため尽力をされ、1985年の日韓国際交流協定締結の礎を築かれた。また、1944年3月神戸工業高等専門学校土木科を卒業するなど日本とは深い縁を持っており、毎年開かれる日韓台都市計画シンポジウムに必ず参加するなど友好的交流に尽力され、今日の国際交流に多大な貢献をされている。</p> <p>以上のような氏の果たしてきた貢献に、日本都市計画学会国際交流賞を授与するものである。</p>